

旧満州を訪ねて

小関 光二

平成 20 年 7 月、方正友好交流の会からのお誘いを受け、4 泊 5 日の日程で、旧満州の旅に女房と参加した。私の家族には、直接、旧満州と係わりはありませんでしたが、今日の日本と日本を取り巻く社会の状況を考えると、どうしても、明治維新から終戦までの出来事を歴史的に整理し、今後日本の進むべき方向やあるべき姿を自分なりに考えてみたいと思っておりました。旧満州で起こったことは、今日でもまだ生々しい過去のことだとして、歴史研究対象としてあまり扱われぬように思う。早く、社会学や歴史学で学者先生方が堂々と研究し発表してもらいたいと思っている。このことが、国民に議論が広がり、世界平和に貢献できる日本の姿を見出す基礎になるのではないのでしょうか。

この旅行で、戦前の日本が旧満州で行ってきた残滓を自らの目で確かめることができました。書物やうわさではある程度のことは知っておりましたが、やはり現場を直視して、その印象はそれは強烈な一語に尽きます。主に訪れたところは、「日本人公墓」、「松花江船着場」、「中国侵略日本軍第 7 3 1 部隊罪証陳列館」、「伊藤博文暗殺の地・ハルビン駅プラットフォーム」、「中国撫順戦犯管理所」、「平頂山惨案遺址記念館」、「張作霖師府博物館」、「九・一八事変（満州事変）歴史博物館」である。

ハルビン市郊外、黒龍江省方正県にある日本人公墓は、当時の国策に従って開拓農民として渡満したとはいえ、ソ連の参戦と終戦時の混乱で、多くの婦女子が逃げ惑いこの地で亡くなられ、中国政府によって建てられた公墓である。約 5 0 0 0 人の遺骨が納められているという。寒さ、食料難、病気の極限の中、亡くなっていかれた方々の心痛を思うと涙が止まりません。文化大革命時にも守り抜いた地元政府に感謝するとともに、墓前に頭をたれて先輩たちの過去の過ちをお詫びいたしました。松花江は対岸がかすむほど川幅広く、当時開拓民は渡し舟で北部地域に分散して行ったが、終戦時にはどうしてこの川を渡ってこられたのかその苦勞が偲ばれた。

7 3 1 部隊罪証陳列館はハルビン市内平房地区にあり、当時は、日本軍の細菌戦研究施設で、中国人が捕らえられ少なくとも 3000 人の被験者が生体実験を受け犠牲となったところである。現場を見て回りましたが、言語に絶するものである。部隊は終戦日前に、残っていた被験者を殺害し、資料を隠滅し、器材設備を破壊し、建物を爆破して、汽車で日本に逃亡帰国したとのことで、このことは、敗戦決定を事前に知っていた証拠で、国民に対する背信行為であるとともに、中国の方々の心に深い傷を残したものである。部隊長の石井四郎は生体実験資料を連合軍に渡して、東京軍事裁判を免れたといわれている。

旧日本軍による同様な悲惨な事件が撫順平頂山村で、1932 年 9 月 16 日に起きた。抗日ゲリラをかくまったとして、約 3000 人の住民が殺害され埋められたものである。これを発掘した状態で記念館に移設し約幅 5 m 長さ 8 0 m にわたって 8 0 0 体の遺骨が展示公開されている。私は 8 0 m を歩きながら無言で謝り、合掌しました。

この他撫順市には、中国撫順戦犯管理所がある。終戦後、旧日本軍の戦犯やその協力者が収容され、人間としての再教育を受けたところである。周恩来総理の「罪を憎んで、人を憎まず」の精神で戦犯を教育し日本に返したところで、その人道的処遇に対し感謝する

とともに、感服した次第である。帰国した方々は連絡会を作り日中友好に今でも尽力しているとのことである。

昭和3年6月4日朝5時25分ごろ、旧日本軍の謀略により張作霖爆殺事件が引き起こされた。瀋陽市内にある彼の邸宅が現在張作霖師府博物館として保存されている。彼は事件後、この邸宅内の第5婦人の館に担ぎこまれ、同日中に死亡したが、張学良への権限委譲が済む21日まで徹底的に死亡事実が伏せられたため、日本に付け入るすきを与えなかった。

しかし、その3年後の昭和6年9月18日に、旧日本軍は、満州を軍事制圧する満州事変のきっかけをつくった柳条湖事件を起こした。九・一八歴史博物館はこの満州事変の屈辱を忘れないために立てられた歴史博物館である。その規模は膨大で、如何に中国が、満州事変を国の屈辱であったかと思っているかが感じとれた。展示の最後には、結論として「中国は何故侵略されたか、それは弱かったからである。侵略を受けないためには強い国にならない。」という趣旨のことが書かれていたのが印象的であった。

この旅からはいろいろなことを学びました。戦後レジームからの脱却を主張する政治家もおれば、これを国民が賛同する傾向もある。隣国中国東北部を旅しただけでも脱却は容易なものではありません。それは言葉や時間だけでは解決できるものとは思われません。国民同士が真に理解し合い、信頼しあうことが必要である。そのためには、精神的鎖国状態を解きほぐし、過去の思い出したくないものも歴史として取り上げて評価し、これを将来の糧として、世界から認められる新しい日本を築くことだと思ふ。これなくしては、日本がなすべき方向である国際平和のための国際貢献も、しようももうまくいかないと考ええる。帰国後、この旅を多くの知人友達にお話しましたが、いい旅をしてきたねと評価してくださった方はたったの2人でした。なかなか厳しい現実です。日本のトンネル（精神的鎖国）はまだまだ続きそうです。人間として人間性を重んじ、そして率直であれば道は開かれていると考えているが。

<こぜきこうじ、NPO 法人日中科学技術交流協会会員 環境カウンセラー>

平和を願って

小関 征子

初めて二人の海外旅行が今回の訪中でした。私は何時か北京へ行きたいと思っていたので、参加させてもらいました。大連飛行場での第一歩の感想は、夫が接している中国人の方達とは全く異質なものでした。しかし、旅行が始まって方々見学するうち、私の心に変化が起き、歴史的に正しく捉えての謝罪の気持ちが第一となりました。また街で会う男の子や大勢の人々に親しみと優しさを感じました。彼の地も今は秋、寒くなったでしょうとあの広い農地を思い出しています。

かつて北京には、昭和13年から終戦の年まで、現地の若い女性むけの「北京生活学校」がありました。婦人之友社、自由学園、全国友の会の創立者羽仁もと子によってつくられ、交流は今でも続いています。平和を願う全国友の会は、よい家庭からよい社会をつくりたいと願い続けておりますので、一會員の私にとって、今回の旅行は有意義かつ、沢山の学びをいただきました。

<こぜきせいこ、全国友の会会員>